

日本語非母語話者向け自治会加入勧誘チラシと その作成振り返りコメントの分析 —修辞機能と脱文脈化程度の観点から—

田中 弥生

要旨

本稿では、日本語母語話者が日本語非母語話者向けにわかりやすく書いた文章と、そのための工夫や配慮の特徴を、選択体系機能言語理論の枠組みにおける談話分析手法の一つである修辞ユニット分析によって検討する。修辞ユニット分析は、文章や談話に対してメッセージ（おおよそ節）単位で発話機能・中核要素・現象定位の認定を行い、その組み合わせから、修辞機能と脱文脈化指数を特定するものである。分析対象は、日本語母語話者が日本語非母語話者向けにわかりやすいように作成したチラシと、そのチラシ作成時の工夫や配慮についての振り返りコメントである。チラシについてのわかりやすさ評定による順位の上位と下位のチラシの特徴、各チラシに対応する振り返りコメントの特徴、さらにチラシのわかりやすさと振り返りコメントの関連の有無について、修辞機能と脱文脈化程度の観点から考察する。分析の結果、わかりやすいとされたチラシに多くみられる修辞機能があることや、わかりやすいとは判断されなかったチラシとその振り返りコメントには共通する修辞機能があることなどが、明らかになった。

キーワード：修辞ユニット分析, 修辞機能, 脱文脈化, わかりやすさ

1. はじめに

1995年1月に発生した阪神・淡路大震災をきっかけに、日本語非母語話者にも理解しやすい「やさしい日本語」が提案された¹。法務省の統計によると、2016年度末の在留外国人数はおよそ238万人²で、2007年度末に200万人に達して以来、200万人を下っていない。このような状況の下、市町村の中には「やさしい日本語」での情報発信を始めた自治体もあり、NHKはWeb上でやさしい日本語のニュースを配信している³。日本語非母語話者はもちろんのこと、現在では日本語母語話者の高齢者や子供などへの配慮も含めて検討され、「やさしい日本語」は、災害等の緊急時のみならず、日常生活においても求められているといえるだろう。「やさしい日本語」のウェブサイトでは、「やさしい日本語」にするためのガイドラインや規則などが紹介され、また、日本語教育や言語学

の分野では文章の難易度を判断するツールも公開されている⁴。「やさしい日本語」は、語彙、文法、背景知識、情報保障などの様々な観点から議論⁵され、宇佐美（2013, 2014）は、日本語母語話者が日本語非母語話者に向けて「非母語話者にもわかりやすくなるように」という意識をもって書く際の工夫や配慮について、調査している。本稿では、修辞機能と脱文脈化程度という観点からわかりやすさを検討する。

本稿の分析対象は、宇佐美（2014）で日本語母語話者によって作成されたチラシと、チラシ作成時の工夫や配慮についての振り返りコメントである。チラシには分かりやすさの順位付けがされている。分析には、選択体系機能言語理論の枠組みの談話分析手法である、修辞ユニット分析（Rhetorical Unit Analysis, 以下 RUA）を用いる⁶。RUA は所定の認定作業によって修辞機能と脱文脈化指数を特定するもので、談話や文章においてどのような修辞機能が用いられているか、使用されている言語表現は脱文脈化程度が高い（「いま・ここ・わたし」から遠い）か低い（「いま・ここ・わたし」に近い）か、という観点からの検討が可能になる。日本語非母語話者にわかりやすいように配慮されたチラシにはどのような修辞機能が用いられているか、使用されている言語表現の脱文脈化程度はどうかという観点から、わかりやすさとそのための工夫や配慮を検討する。さらに、これらの修辞機能や脱文脈化程度は、同一著者によって書かれた異なる種類の文章で似た傾向を示すか、文章の種類が異なれば著者が同一でも異なる傾向を示すのか、検討する。研究課題は、(1)わかりやすさ上位のチラシのテキスト部分と下位のチラシのテキスト部分では修辞機能や脱文脈化指数に違いがあるか（わかりやすいチラシの特徴は何か）、(2)振り返りコメント文章の修辞機能や脱文脈化指数は上位のチラシ作成者と下位のチラシ作成者で違いがあるか（わかりやすいチラシを作成する人とそうでない人では振り返りコメントに特徴があるか）、(3)上位・下位それぞれのチラシのテキスト部分と振り返りコメント文章の修辞機能や脱文脈化程度には関連があるか（チラシのわかりやすさとコメント文章には関連する特徴があるか）、の3点である。以下、2節で修辞ユニット分析の概要と先行研究について述べ、3節で分析方法について、4節で分析結果と考察を示し、5節でまとめと今後の課題について述べる。

2. 修辞ユニット分析の概要と先行研究

本研究で用いる RUA は、バフチンの *chronotope* の概念である空間と時間の融合が言語テキストにどのように示されているかを知り、脱文脈化言語（*de-contextualised language*）・文脈化言語（*contextualised language*）⁷の相違を捉える枠組みである。Cloran（1994, 1999, 2010）によって、英語母子会話の分析や、学校における教師と生徒の説明的な談話の様相が示されている。RUA はテキストの意味単位を特定するための手法（佐野 2010b）だが、その過程において発話機能（*speech function*）、中核要素（*central entity*）、現象定位（*event orientation*）の3つをメッセージ単位で認定することで、その組み合わせ

せから、修辞機能 (rhetorical function) の種類と脱文脈化指数 (degree of de-contextualisation) を知ることができる。メッセージは、原則として節を最小単位として表わされるものと捉える。認定手順の概要は 3.2 で述べる⁸。水澤 (2015, 2017) は日本人英語学習者の英文エッセイや英作文の分析を行っており、また、佐野・小磯 (2011) によって日本語への適用が検討され、英語と日本語の言語の違いに関わる修正が加えられている。RUA を用いた日本語の研究として、佐野 (2010b) は、特定目的の作文指導への利用について、修辞機能と脱文脈化指数の出現状況から作文の専門性の判断が可能であり、専門性に問題がある場合には、中核要素や現象定位の変更の指導によって改善が可能であることを述べている。その他、インターネット上の Q&A サイトの談話構造 (田中・佐野 2011) やクチコミサイトの分析 (田中 2013a, 2013b)、職場の会話や相談場面における談話構造の分析 (田中 2015, 2017) などが行われており、談話における修辞機能の展開の様相や、質問と回答の対応における脱文脈化の観点からの特徴などが明らかにされている。

3. 分析

3.1 分析対象

分析対象は、宇佐美 (2014) において日本語母語話者が非母語話者向けに作成した「自治会への勧誘チラシ」のテキスト部分 (以下、チラシテキスト) と、そのチラシを作成した際に工夫や配慮した点についての振り返りコメント文章 (以下、コメントテキスト) である。作成されたチラシについて、文字数とリーダビリティ値、及び別の日本語母語話者による情報精選度とデザインの評定から、わかりやすさの順位付けが行われている (宇佐美 2014)。本研究では、チラシテキスト 35 件のうち「わかりやすさ」評定結果の上位下位各 1~5 位の計 10 件のチラシテキストとそれぞれに対応するコメントテキスト 10 件合計 20 件のテキストについて分析を行った。分析対象となった文の数は、表 1 に示したように、チラシテキスト 115 文、コメントテキスト 169 文の、合計 284 文である。

表 1. 分析対象の文の数

	1位	2位	3位	4位	5位	上位計	31位	32位	33位	34位	35位	下位計	計
チラシ	17	11	17	4	14	63	6	15	16	11	4	52	115
コメント	11	24	16	16	19	86	14	22	14	22	11	83	169
計												284	



図 1. わかりやすい評定上位チラシの例

～「じちかい」に入ろう！～
 「じちかい」は「自治会」と書きます。町内に住む人が一人や家族だけではどうしたらいいかわからないことを町内に住む人たちにお手伝いをお願いしたり、役所と交渉したりする窓口になります。町内で主に次のようなことをしています。

- 犯罪がおきないよう見回りしたり、暗い場所が無くなる様になります。
- 地震、風水害、火事がおきたことを考えて、どう動いたらいいかをいくつかの集まりに分かれて学びます。
- 交通事故がおきないよう横断歩道で見守ったり、警察と協力して町内の人たちのために交通安全で覚えてもらいます。
- お祭りは神さま、仏さまが出てくるので他の宗教の人にはうれしくないことかもしれません。お祭りがうまくいこうとお手伝いできることはしようか?と覚えてもらえれば楽しくなります。
- お祭り以外にも季節により、町内の人たちが集まって楽しめることをします。
- 家庭から出るゴミは別にお渡しします「ゴミの出しかた」をわかってもらい、決められた日に出して下さい。
- ゴミを出すところも決められたところしか出せません。ゴミの出しかた、出すところも決められるのは町内が汚くなるを防ぐためです。ゴミを集める車は決められたところ以外は集めません。汚くなれば、伝染病がおきるかもしれません。
- 役所、学校、その他などの連絡や、交渉、文書などを町内にまわしたり、配ったりします。
- 自治会員であれば、自治会館を決まりに従って利用することも可能です。
- 他にも色々なことをしています。わからないことは町内の役員にお聞きください。
- 自治会費は月 300 円となります。

大川町自治会
 役員
 2014/01/25

図 2. わかりやすい評定下位チラシの例

3.2 認定手順

3.2.1 メッセージの分割と種類の認定

まず、分析対象をメッセージ単位に分割 (segment) し、メッセージの種類を認定する (図 3 参照)。メッセージは原則として節だが、埋め込み節はメッセージとして扱わない。主部や述部が省略されていると考えられる場合には、補足して考える。4 種類のメッセージの種類のうち「自由」と「拘束;形式的従属」がこの後の発話機能・中核要素・現象定位の認定対象となる。

例えば、「私は傘を買った。」のメッセージの種類は「自由」である。「私は本を買い、傘を買った。」の従属節「私は本を買い、」は、主節の「傘を買った」とは並列の関係であるため、メッセージの種類は「拘束;形式的従属」である。「雨が降ったので、私は

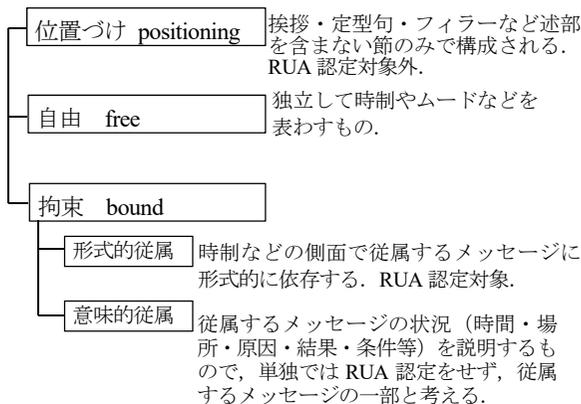


図 3. メッセージの種類

傘を買った。」の「雨が降ったので、」は主節の原因を表しているためメッセージの種類は「拘束;意味的従属」で、単独では RUA 認定をせず、従属するメッセージ「私は傘を買った。」の一部と考える。表 2 はコメントテキストからの具体例である。

表 2. メッセージへの分割とメッセージの種類認定の例 (サンプル No. 8 コメント)

文	メッセージ	メッセージの種類	認定対象	認定対象メッセージ数
1 「自治会勧誘のためのちらし」作成にあたって感じたこと	a 「自治会勧誘のためのちらし」作成にあたって感じたこと	位置づけ	×	0
2 やさしい課題のようでしたが、以外 [ママ] に内容にボリュームがあり大変でした。	b やさしい課題のようでしたが、	拘束;形式的従属	○	2
	c 以外に内容にボリュームがあり	拘束;意味的従属	×	
	d 大変でした。	自由	○	
3 思うような表現が思いつかず苦戦続きでしたが、初めて体験するものであり、時間がかかりましたが楽しく作業することができました。	e 思うような表現が思いつかず	拘束;意味的従属	×	3
	f 苦戦続きでしたが、	拘束;形式的従属	○	
	g 初めて体験するものであり、	拘束;意味的従属	×	
	h 時間がかかりましたが	拘束;形式的従属	○	
	i 楽しく作業することができました。	自由	○	

表 2 の文 1 は体言止めで述部がないため「位置づけ」に分類され、認定対象外となる。文 2 は 2 つの従属節 (メッセージ b, c) と主節 (d) があり、メッセージ b は「拘束;形式的従属」、c は主節 d の見解の理由を示しているため「拘束;意味的従属」に、主節 d は「自由」に分類した。文 3 は 4 つの従属節 (e, f, g, h) と主節 (i) から成る。メッセージ e, g はそれぞれ後続の従属節の理由を示すものであるため「拘束;意味的従属」となり、f, h は「拘束;形式的従属」、主節の i は「自由」と分類した。前述のように、種類が「拘束;形式的従属」と「自由」であるメッセージについて、この後の認定を行うため、この部分の RUA 認定対象メッセージ数は、文 1 は 0 (無し)、文 2 は 2 つ、文 3 は 3 つとなる。

表 1 に示した本研究の分析対象 284 文について、上述のようにメッセージに分割して種類を認定した。その結果を、チラシテキストについて表 3 に、コメントテキストについて表 4 に示す。それぞれ、太線で囲んだ「拘束;形式的従属」と「自由」について、この後の発話機能・中核要素・現象定位の認定を行う。チラシテキストでは、チラシのわかりやすさ評定順位の上位分 65 メッセージ、下位分 66 メッセージ、コメントテキストでは、同様に上位分 77 メッセージ、下位分 71 メッセージとなった。なお、チラシテキストの下位 5 位のデータではすべてのメッセージ (14 件) が「位置づけ」であった。

表 3. チラシテキストのメッセージの種類

	1位	2位	3位	4位	5位	上位計	31位	32位	33位	34位	35位	下位計
位置づけ	4	7	6	0	4	21	14	3	1	13	1	32
拘束;意味的従属	0	2	0	2	0	4	0	5	9	2	5	21
拘束;形式的従属	0	0	0	0	0	0	0	4	1	5	4	14
自由	7	17	10	16	15	65	0	19	14	9	10	52
計	11	26	16	18	19	90	14	31	25	29	20	119

表 4. コメントテキストメッセージの種類

	1位	2位	3位	4位	5位	上位計	31位	32位	33位	34位	35位	下位計
位置づけ	4	0	2	0	2	8	1	1	0	1	0	3
拘束;意味的従属	13	11	16	6	14	60	8	7	10	13	2	40
拘束;形式的従属	8	3	7	4	0	22	2	6	5	3	6	22
自由	13	11	15	4	12	55	5	14	16	10	4	49
計	38	25	40	14	28	145	16	28	31	27	12	114

3.2.2 発話機能の認定

メッセージの種類を確認した後、発話機能を認定する。発話機能は、「提言 proposal」か「命題 proposition」に分類する (Halliday and Matthiessen 2004)。「提言」は表 5 の(a)の品物・行為の交換 (提供あるいは命令) に関するメッセージ、「命題」は(b)の情報の交換 (陳述あるいは質問) に関するメッセージが該当する。

表 5. 発話機能 (Halliday & Matthiessen 2004: 107)

role in exchange	commodity exchanged	
	(a)goods & service	(b)information
(i)giving	“offer” would you like this teapot?	“statement” he’s giving her the teapot
(ii)demanding	“command” give me that teapot!	“question” what is he giving her?

提言

命題

例えばチラシテキストの中の、「「じちかい」に入ろう！」(チラシテキストサンプル No.26) など相手に行為を要求するメッセージは発話機能「提言」に該当する。一方、「自

治会ってなに？」(同 No.18) のような情報を要求する質問や「ゴミを集める車は決められたところ以外は集めません。」(同 No.26) のような情報を提供するメッセージは発話機能「命題」である。前掲の表 2 の RUA 認定対象メッセージはすべて情報の交換で、発話機能は「命題」である。

3.2.3 中核要素の認定

次に中核要素を認定する。中核要素は、コミュニケーションの当事者(話し手, 聞き手, 書き手, 読み手)とメッセージの内容との空間的距離を示す。メッセージの中心となるもの(基本的に主語)がコミュニケーションの場面に存在するか否かによって特定する。

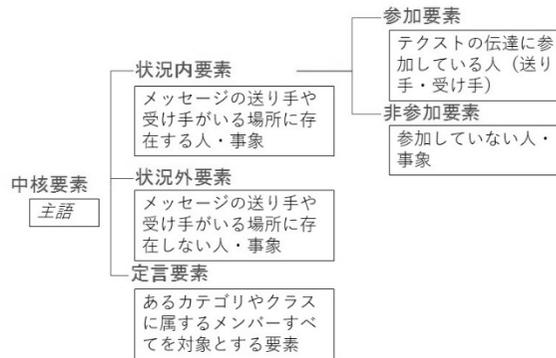


図 4. 中核要素の分類 (佐野・小磯 2011)

中核要素の分類を図 4 に示す。中核要素は基本的には主語によって表現されるが、照応など前後のメッセージを用いて判断する場合もある。また、「このカレーは野菜がたっぷりだ」のように、述部「野菜がたっぷりだ」が「このカレー」の性質を表している場合には、「このカレー」を中核要素と認定する。例えば表 2 の文 2 の中のメッセージ b 「やさしい課題のようでしたが、」 d 「大変でした」はいずれも「チラシを作成することは」が省略されていると考え、中核要素は「状況外」と認定する。文 3 の中のメッセージ i 「楽しく作業することができました」は、「私は」が省略されていると考え、「状況内;参加」と認定する。

3.2.4 現象定位の認定

次に現象定位を認定する。現象定位は、メッセージによって表現されている出来事がいつ起こったか、これから起こるのかなどを、メッセージが伝達されている時 (time of speaking) を基準とした時間的な位置を特定して、発話・発信場面との時間的距離を示す要素である。副詞や述部から判断する。現象定位の分類を図 5 に示す。

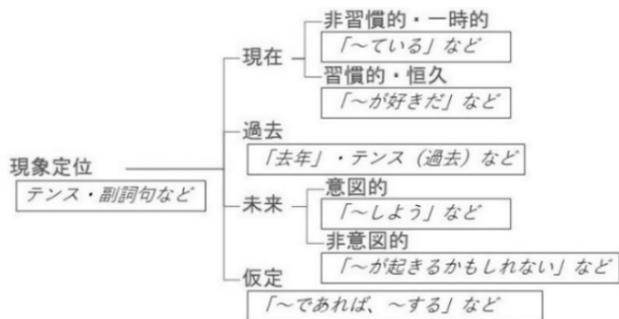


図 5. 現象定位の分類 (佐野・小磯 2011)

例えば表2の文2に含まれる2つのメッセージ「やさしい課題のようでしたが、」「大変でした。」の現象定位はいずれも「過去」と認定する。

3.2.5 修辞機能の特定と脱文脈化指数の確認

発話機能と中核要素と現象定位の組み合わせによって、表6に示したように、修辞機能が特定され、脱文脈化指数を確認できる。

表 6. 発話行為・中核要素・現象定位からの修辞機能の特定と脱文脈化指数の確認

			発話機能						
			命題						
			現象定位						
			現在		過去	未来		仮定	
非習慣的 一時的	習慣的 恒久	意図	非意図						
中核要素	状況内	参加	[1]行動	[2]実況	[7]自己記述	[3]状況内回想	[4]計画	[6]状況内推測	
		非参加	n/a	[8]観測	[5]状況内予想				
	状況外	[9]報告		[13]説明	[10]状況外回想	[11]予測	[12]推量		
		定言		n/a	[14]一般化				

「n/a」は該当なし/背景が灰色の部分が修辞機能の種類/[]内は脱文脈化指数

(佐野 (2010b) および佐野・小磯 (2011) の修辞機能の特定表に脱文脈化指数を合わせて示したもの)



図 6. 修辞機能と脱文脈化指数

脱文脈化指数とは、中核要素の here (発話地点との空間的な距離；ここ、わたし) の程度と現象定位の now (発話時点との時間的な距離；いま) の程度によって、近いものから遠いものまで修辞機能を線上に示した際の順序の指数で、1から14までである(図6)。脱文脈化指数の数値が大きいものほど脱文脈化の程度が高く一般的・汎用的で、小さいものほど脱文脈化の程度が低く個人的・限定的であることを示す。例えば、目の前の相手に向かっての「傘を貸してよ」という発話は、発話機能が「提言」で、修辞機能は「行動」、脱文脈化指数は「1」で、最も脱文脈化程度が低い。また、目の前の相手に向かって「昨日傘を買ったんだ」と伝える場合には、情報を提供しているので発話機能は「命題」、中核要素は「私は」が省略されていると考え「状況内;参加」、現象定位は過去形なので「過去」、この組み合わせを表6で確認し、修辞機能は「状況内回想」、脱文脈化指

数は「3」と特定される。さらに、伝える相手が目の前にいるか否かにかかわらず、「傘
ってというのは、雨が降った時に濡れないようにさすものだよ」のような一般的な定義を
述べる場合には、発話機能は「命題」、中核要素は、「～ってというのは」という表現が使
われていることから、定義されているものとして「定言」、現象定位は、「～っていうの
は～ものだよ」という表現から定義や特徴が表されていると考えて「現在;習慣的・恒久」
となり、表6から、修辞機能は「一般化」、脱文脈化指数は「14」と特定される。

表2で示したデータの認定過程と修辞機能及び脱文脈化指数を(1)に示す。【】括弧内
は、発話機能&中核要素&現象定位⇒修辞機能・脱文脈化指数を表している。なお、明
示されていない主語は〔φ=〕として補足して示した。

(1)

- a. 「自治会勧誘のためのちらし」作成にあたって感じたこと
(対象外)
- b. 〔φ=チラシ作成は〕やさしい課題のようでしたが、
【命題&状況外&過去⇒状況外回想・10】
- c. 以外に内容にボリュームがあり
(意味的従属)
- d. 〔φ=チラシ作成は〕大変でした。
【命題&状況外&過去⇒状況外回想・10】
- e. 思うような表現が思いつかず
(意味的従属)
- f. 〔φ=私は〕苦戦続きでしたが、
【命題&状況内;参加&過去⇒状況内回想・03】
- g. 初めて体験するものであり、
(意味的従属)
- h. 〔φ=チラシ作成は〕時間がかかりましたが
【命題&状況外&過去⇒状況外回想・10】
- i. 〔φ=私は〕楽しく作業することができました。
【命題&状況内;参加&過去⇒状況内回想・03】

3.2.1で述べたように、aはメッセージの種類が「位置づけ」のため、RUA認定の対象
外である。bの「やさしい課題のようでしたが」は、主語が明示されていないが、「チラ
シ作成は」や「チラシを作成する課題は」などが省略されていると考えられる。「チラシ
作成は」はこの振り返りコメント作成時のコミュニケーションの当事者（状況内;参加要
素）でもその場にあるもの（状況内;非参加要素）でもなく、その場にはないものである

ため、中核要素は「状況外」と認定される。また、述部は「～ようでしたが」なので、現象定位は「過去」である。表6から、修辞機能は「状況外回想」、脱文脈化指数は「10」と特定される。すべてのメッセージについて、このように、発話機能、中核要素、現象定位を認定し、その交差から、修辞機能と脱文脈化指数を確認する。

中核要素は空間的距離のレベル、現象定位は時間的距離のレベルを示している。「いま・ここ・わたし」により近く脱文脈化の程度の低い言語表現から、「いま・ここ・わたし」からより遠く脱文脈化の程度の高い言語表現まで、その修辞機能と脱文脈化指数は、図7に示すような空間と時間の2軸で表すことができる。この図では左下がより「いま・ここ・わたし」に近く、右上がより遠い。

図7中のアルファベットの丸と矢印は、表2と(1)に示したコメントテキストのうちの、RUA認定対象メッセージ(b, d, f, h, i)について、これらのメッセージがコメントの中で空間的距離と時間的距離の2つのレベルでどの位置にあるかを示したものである。時間的距離のレベル(横軸)では過去にとどまったまま、空間的距離のレベル(縦軸)が状況内と状況外の間で移動していることがわかる。

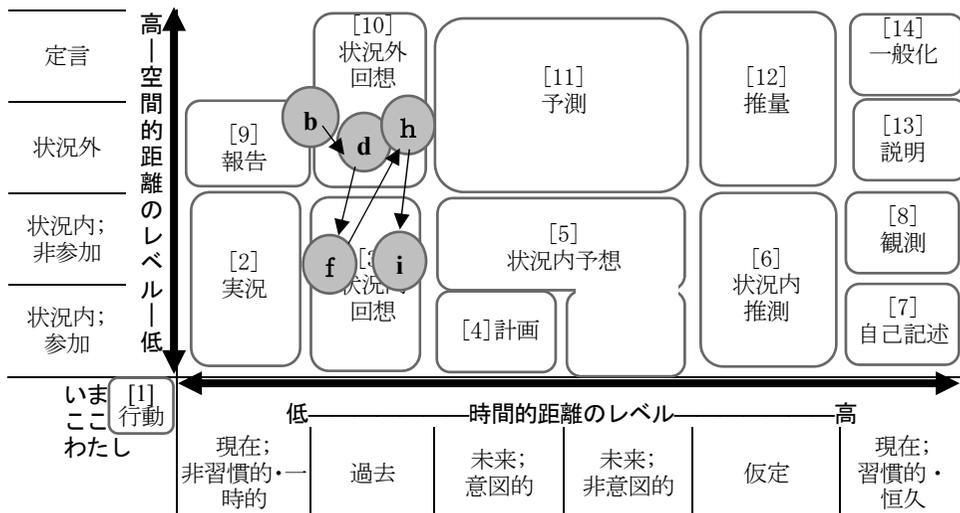


図7. 空間的距離と時間的距離のレベルから示す修辞機能と脱文脈化指数

4. 分析結果と考察

チラシテキストとコメントテキストのそれぞれにおける修辞機能と脱文脈化指数の頻度を、図8と図9に示す。

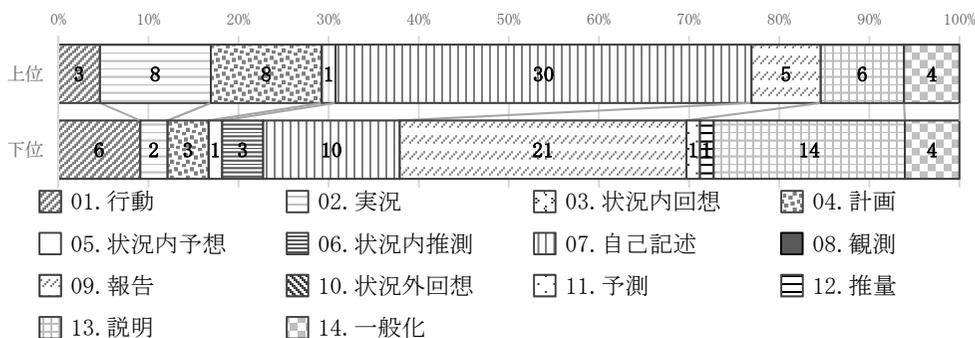


図 8. チラシテキストにおける修辭機能と脱文脈化指数の頻度

わかりやすさの評定が上位のチラシテキストでは、修辭機能「自己記述」が最も多く使用されている（30件）。「自己記述」は例えば、「ごみの出し方をみんなに教えてまわります。」（サンプル No.6）のように、当事者の習慣などを表すもので、自治会の具体的な活動を紹介する内容である。一方、わかりやすさの評定が下位のチラシでは修辭機能「報告」が多い（21件）。「報告」は、「地域内には個人や家庭だけでは解決できない様々な問題がたくさんあります。」（サンプル No.19）のように、その自治会がというよりは一般的な内容を述べている。

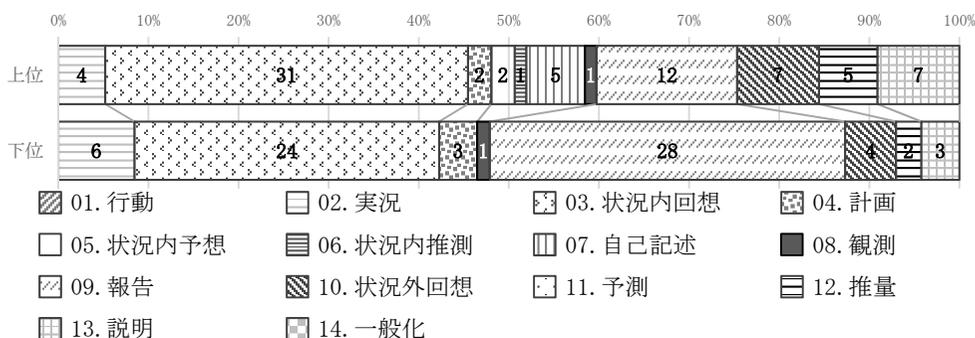


図 9. コメントテキストにおける修辭機能と脱文脈化指数の頻度

チラシのわかりやすさの評定が上位でも下位でも、コメントテキストでは修辭機能「状況内回想」が多い（上位31件、下位24件）。チラシ作成時を振り返って工夫した点などについて書くため、例えば、「今回の提出物では適当なイラストを用いたが、」（上位。サンプル No.6）や「分かりやすい図にしたかったが」（下位。サンプル No.16）のように、自身の行為や心情などを過去形で表現している。なお、下位では修辭機能「報告」がさらに多く（28件）、この2つの修辭機能で大半を占めている。一方上位では「状況内回想」以外にさまざまな修辭機能を使用されているのが特徴的である。

次に、図 10 から図 13 に、各データの分析結果を空間的距離と時間的距離の 2 つのレベルに配置する形で示す。円の大きさは修辞機能の出現数を示している。図 10、図 11 はチラシテキストの結果である。

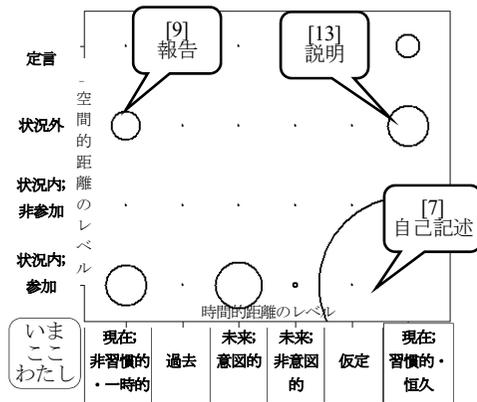


図 10. 上位 5 件チラシテキスト

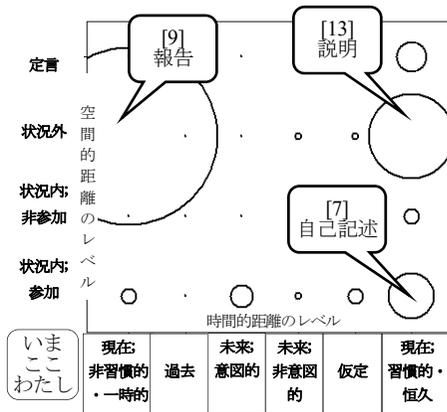


図 11. 下位 5 件チラシテキスト

図 10 を見ると、わかりやすさの評定が上位のチラシでは空間的距離のレベルが「ここ・わたし」に近く（縦軸で下方）、時間的距離のレベルが「いま」から遠い（横軸で右方）表現が使用されていることがうかがえる。反対に、図 11 からは、わかりやすさの評定が下位のチラシでは空間的レベルが「ここ・わたし」から遠く、時間的レベルが「いま」に近いことがうかがえる。自治会への勧誘という目的のチラシにおいては、中核要素（主語）が「状況内;参加」や「状況内;非参加」で当事者として、習慣について多く述べるほうが好印象を与え、一般的な性質や出来事、一般的な習慣を述べるのでは印象がいいわけではない可能性があるだろう。

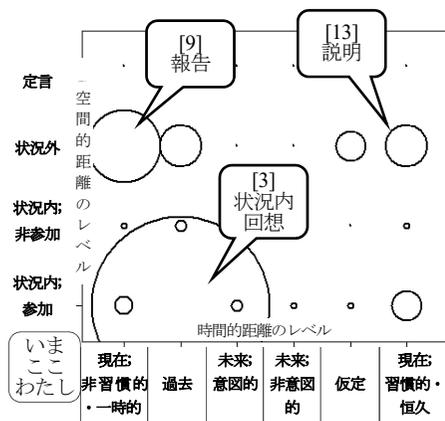


図 12. 上位 5 件コメントテキスト

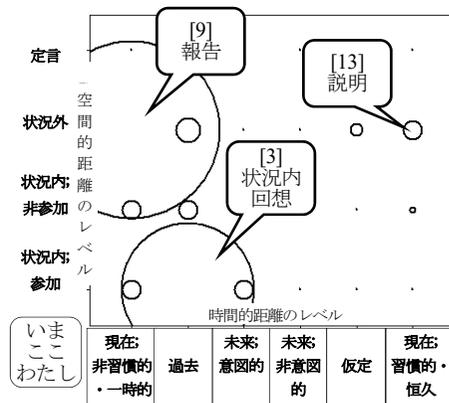


図 13. 下位 5 件コメントテキスト

図 12 と図 13 はコメントテキストの結果である。コメントテキストはチラシを作成した際の工夫や配慮についての振り返りであるため、図 12 も図 13 も全体的に時間的距離のレベルは過去が中心になっている（横軸の左方に寄っている）。しかし、空間的距離のレベル（縦軸）を見ると、両者には違いがみられる。チラシがわかりやすい評定を受けている人が書いた振り返りコメント（図 12、上位 5 件）のほうが、図 13（下位 5 件）より、当事者や当事者に近い人やモノを主語にしていると考えられ、空間的距離のレベルが「ここ・わたし」に近いものが多い。また、上位のコメントテキストのほうが、様々な修辞機能が使用されていることがうかがえる。

次に、わかりやすいチラシ上位による、チラシテキストとコメントテキストを比較してみる。図 10（チラシテキスト）と図 12（コメントテキスト）では時間的距離のレベルに違いがあり、チラシテキストでは、自分たちの習慣的な、例えば自治会の業務内容を書いたのに対して、コメントテキストではチラシ作成時にどうしたか、という自分が行ったことを表現したと考えられる。

一方、わかりやすいチラシ下位の図 11（チラシテキスト）に比べて図 13（コメントテキスト）では、一般的なことを説明する修辞機能「説明」（脱文脈化指数 13）と自分の習慣について述べる「自己記述」（同 7）が大きく減り、自分や我がことと思うことの過去の経験「状況内回想」（同 3）が増えている。これは振り返りコメントである故と考えられる。しかし一般的な事象を伝達する「報告」（同 9）に変化がないことが特徴的で、目的や媒体にあわせた修辞機能の使い方に工夫の余地がある可能性が考えられるだろう。

5. まとめと今後の課題

本稿では、修辞ユニット分析によって、日本語母語話者が非母語話者向けに作成したチラシのテキスト部分と、そのチラシを作成した際の工夫について書いた振り返りコメント文章について、使用されている修辞機能と脱文脈化指数の頻度と、空間的・時間的距離のレベルからの様相を確認し、チラシのわかりやすさ順位との関連を検討した。その結果、以下のことが明らかになった。

- (1) チラシのわかりやすさ順位上位のチラシと下位のチラシではそのテキストの修辞機能や脱文脈化程度に違いがあり、わかりやすいと判断された上位のチラシでは、自治会の活動を我がこととして表現していることがうかがえた。
- (2) 上位のチラシ作成者の振り返りコメント文章と下位のチラシ作成者の文章では、時間的距離のレベルはともに「過去」が多いという点で共通しているが、上位のコメントでは様々な修辞機能が用いられている点の特徴的である。
- (3) 上位の作成者では、空間的距離のレベルではチラシテキストとコメントテキストともに「ここ、わたし」に近い表現を使用する点において似た傾向が見られるが、

時間的距離のレベルでは、チラシのときは習慣的な表現、振り返りコメントでは過去、というように、違いがある。下位の作成者では、チラシ、コメントともに「報告」が最も多く使用されており、目的や性質の異なる発信にもかかわらず、同一の修辞機能が多用されている点が特徴的である。

本稿では、「自治会への勧誘」というチラシ作成課題のデータについて、修辞ユニット分析によってその言語表現の特徴を検討した。わかりやすいと評定されたチラシでは、自治会の活動を我がことと考えて説明している点がわかりやすいという評価につながったことがうかがえる。ただし、修辞機能が「実況」であればわかりやすくなるか、主語を「状況内」にすればわかりやすくなる、ということではなく、わかりやすさとの関係は、その文書（ここでは自治会への勧誘のためのチラシ）の目的によって異なることが予想できる。また、わかりやすいチラシを作成した人は文章の目的によって表現を変えているのに対し、わかりやすいと判断されていないチラシの著者は目的による表現の変更をしていないことから、このような種類の異なる文章の修辞機能や脱文脈化程度の確認が書き手の文章表現力を推測する手がかりとなる可能性がうかがえる。今後の課題として、様々な目的のために書かれた文書を RUA を用いて分析し、類型化や文章表現力推測への利用の可否を検討していきたい。また、わかりやすさには複数の要素がかかわりあうと考えられるため、語彙やリーダビリティなどとの相関や、組み合わせての判断などについても、検討を進めていきたいと考えている。

謝辞

本研究は JSPS 科研費 JP22242013（研究代表者：庵功雄氏）の助成を受けて宇佐美洋氏が収集したデータを、庵氏、宇佐美氏の下承の上で利用して行われたものです。また JSPS 科研費 JP15K02535（研究代表者：田中弥生）の助成を受けたものです。

註

- ¹ <http://human.cc.hirosaki-u.ac.jp/kokugo/EJ1a.htm>
- ² <http://www.moj.go.jp/content/001220573.pdf>
- ³ <http://www3.nhk.or.jp/news/easy/>
- ⁴ 日本語文章難易度判定システム (<http://jreadability.net/>),
帯3 (<http://kotoba.nuce.nagoya-u.ac.jp/sc/obi3/>),
リーダビリティ測定ツール (<http://readability.nagaokaut.ac.jp/readability/>)
- ⁵ 庵・イ・森 編 (2013) 『「やさしい日本語」は何を指すか』 ココ出版
- ⁶ 各種認定及び用語は原則として佐野 (2010a), 佐野・小磯 (2011) に依った。
- ⁷ Cloran (1999)に基づき脱文脈化言語を「一般化された要素の習慣的・恒久的な行動や状態につ

いて表現する言語」、文脈化言語を「物質的状況に存在する要素の現在の行動や状況について表現する言語」とする。

⁸ 詳細は佐野（2010a）、佐野・小磯（2011）を参照されたい。

参考文献

- Cloran, C. (1994) *Rhetorical Units and Decontextualisation: An Enquiry into Some Relations of Context, Meaning and Grammar*. Nottingham: University of Nottingham.
- (1999) Contexts for learning. In Christie, F. (ed.) *Pedagogy and the Shaping of Consciousness*, London: Cassell, 31-65.
- (2010) Rhetorical unit analysis and Bakhtin's chronotype. *Functions of Language*. 17:1, 29-70.
- Halliday, M. A. K. and Matthiessen. C.M.I.M. (2004) *An Introduction to Functional Grammar (3rd ed.)* London: Arnold.
- 宇佐美洋 (2013) 「「やさしい日本語」を書く際の配慮・工夫の多様なあり方」(庵 功雄・イ ヨンスク・森 篤嗣 編)『「やさしい日本語」は何を目指すか』, ココ出版, 第12章, 219-236.
- (2014) 「「外国人にわかりやすい文書」を書くための配慮—「やさしい日本語」の作成ルール」の効果とその活用—」CAJIE Annual Conference Proceedings, 174-183.
- 佐野大樹 (2010a) 日本語における修辞ユニット分析の方法と手順 ver.0.1.1—選択体系機能言語理論(システムック理論)における談話分析—(修辞機能編) <http://researchmap.jp/systemists/資料公開/> (RUAの方法と手順 ver.0.1.1) 2017/2/17 閲覧.
- (2010b) 「選択体系機能言語理論を基底とする 特定目的のための作文指導方法について—修辞ユニットの概念から見たテキストの専門性—」『専門日本語教育研究』12, 19-26.
- 佐野大樹・小磯花絵 (2011) 「現代日本語書き言葉における修辞ユニット分析の適用性の検証—「書き言葉らしさ・話し言葉らしさ」と脱文脈化言語・文脈化言語の関係—」『機能言語学研究』6, 59-81.
- 田中弥生・佐野大樹 (2011) 「Yahoo!知恵袋の質問における修辞機能の分布—修辞ユニット分析を用いて—」『特定領域研究「日本語コーパス」平成22年度公開ワークショップ(研究成果報告会) 予稿集』, 259-266.
- 田中弥生 (2013a) 「評価の高低によるクチコミサイト「アットコスメ」における談話構造の特徴—修辞ユニット分析を用いて—」『神奈川大学 言語研究』35, 1-23.
- (2013b) 「クチコミサイトにおける修辞機能の商品評価の高低による違い—修辞ユニット分析による検討—」『機能言語学』7, 59-74.
- (2015) 「職場における談話の修辞機能と脱文脈化の観点からの分析」『第8回コーパス日本語学ワークショップ予稿集』, 215-224.
- (2017) 「相談における談話構造—修辞機能と脱文脈化の観点からの分析—」『言語資源活用ワークショップ2016』, 69-78.

- 水澤祐美子 (2015) 「学習者コーパスを用いた日本人中高生による英作文の特徴と課題」『Lingua』
25, 69-87, 上智大学 言語教育研究センター.
- (2017) 「日本人大学生のショート・エッセイにおける言語的特徴」『Lingua』 27, 27-42,
上智大学 言語教育研究センター.